

ユーフォルビア

西村 悟郎(文化学科)

1. はじめに

ユーフォルビアという名前を聞いて、読者はどのような植物を思い出されるだろうか。ユーフォルビア属 (*Euphorbia*) は全世界に2000種が分布する大きな属で、我々に身近な植物も多く含まれる。先ずクリスマスに登場するポインセチア (*E. pulcherrima*) は皆さんご存知だろう。また、サボテンの仲間に興味のある人であれば、刺に覆われた多肉の植物群を思い出されるかもしれない。春に道端で咲くトウダイグサ (*E. helioscopia*) は、雑草として日本の自然の一部になっており、夏に白い苞をつける一年草のハツユキソウ (*E. marginata*) は、夏には欠かせない花壇植物の一つである。これら園芸植物として扱われるものの多くはアフリカ、マダガスカル、アメリカ大陸の熱帯、また亜熱帯原産の寒さに弱いものが多いが、温帯原産の中には耐寒性のある宿根草、半低木の一群があり、ヨーロッパ、特にイギリスでは広く庭園で栽培され庭園では欠かすことのできない重要な植物になっている。これらのユーフォルビアは、かつてプラントハンターによって各原産地からイギリスにもたらされたものであり、現在はイギリスの気候にあった花壇植物として重要な役割を果たしている。最近、それらの耐寒性のユーフォルビアが日本にも紹介されるようになり、種苗販売会社のカタログやインターネットのリストにも写真つきで載るようになってきた。しかし、まだ一般の花壇で広く栽培されるには至っていない。著者はイギリスで、ボーダー花壇に多くの耐寒性ユーフォルビアが用いられているのも見て、それらの

花壇材料としての重要性を深く認識した。

2. 耐寒性ユーフォルビア

耐寒性のユーフォルビアはヨーロッパの地中海沿岸から中央部、トルコ、ヒマラヤ東部などがおもな原産地である。宿根草および半低木が含まれ、草丈は20cmほどのものから2mを超えるものまでである。葉は卵形から披針形、線形まであり、色は黄緑色、濃緑色、濃紫赤色などがある。落葉性と常緑性に分かれる。花の周囲を総苞が取りかこみ椀状花序を形成し、花序は散房形あるいは散形状に集合する。花そのものはごく小さくて観賞に値しないが、総苞が発達して着色し花のように見える。総苞の色は多くの種で緑色がかった淡い黄色をしている。また、種類によっては総苞が赤みを帯びるものもある。開花時期は種類によって異なり、3月から早咲きの種類が咲きだし、8月に遅咲きの種類が咲く。葉や茎を傷つけると白い樹液が出るが、樹液の中には有毒物質が含まれているので、皮膚につけたり目に入れたりしないように気をつける。生育環境は日当たりのよい場所を好むが、半日陰でもよく育つ。繁殖は種子がよくつくので、種まきをする。挿し木もできる。

3. イギリスと日本で栽培されているユーフォルビアの種類と比較

著者がイギリスで見かけた種は次のようなものである。

E. acanthothamnos、*E. amygdaloides*、*E. amygdaloides* var. *robbiae*、*E. characias*、*E. characias* subsp. *wulfenii*、*E. characias* subsp. *wulfenii* 'John Tomlinson'、*E. characias* 'Wilcott' *E. corallioides*、*E. cornigera*、*E. cyparissias*、*E. cyparissias* 'Fens Ruby'、*E. dulcis* 'Chameleon'、*E. griffithii* 'Fireglow'、*E. marginata*、*E. x martinii*、*E. myrsinites*、*E. nicaeensis*、*E. oblongata*、*E. palustris*、*E. polychroma*、*E. seguieriana* subsp. *niciciana*、*E. shillingii*、*E. sikkimensis*、*E. spinosa*、*E. stygiana*、*E. waliichii*。これらは1993~94年に著者が1年間イギリスに滞在した際、およびその後、何度かイギリスを訪問した際、ウィズレーガーデンのミックスボーダーとカントリーガーデン、およ

びキューガーデンを中心に観察したものである。一方、2007年3月現在、日本の種苗業者の雑誌やインターネットのカタログで扱われているユーフォルビアは次のようなものである。*E. amygdaloides* 'Purpurea'、'Red Wing'、*E. amygdaloides* var. *robbiae*、*E. characias*、*E. characias* 'Silver Swan'、'Black Pearl'、*E. cyparissias* 'Claris Howard'、*E. dulcis* 'Chameleon'、*E. x martinii*、*E. myrsinites*、*E. polychroma* 'Koga'、*E. rigida*。1994年ごろは耐寒性のユーフォルビアは日本ではほとんど見られなかったが、この10年余りの間に種苗業者でも扱われるようになり、植物園や比較的大きな庭園の宿根草花壇にはユーフォルビアが栽培されるようになってきた。ユーフォルビアの花壇植物としてのよさが認められるようになったといえる。今後、一般家庭でも栽培され、花壇材料として広く普及していく可能性を秘めた植物群である。

4. 耐寒性ユーフォルビアの紹介

耐寒性ユーフォルビアは落葉性と常緑性に分けられる。落葉性は春に芽を出し、茎を伸ばして葉を付け、秋から夏にかけて花を咲かせて秋には枯れる。枯れ残った茎葉を取り除けば地上部は無くなる。一方、常緑性は冬も地上部が残り春には株の基部から新しい茎が伸びてその先端に花を咲かせるか、前年生の株の腋部から新しい茎を伸ばして花を着ける。以下、それぞれのタイプについて主な種を紹介する。

1) 落葉性ユーフォルビア

(1) *E. cornigera* (図1)

草丈1.3~1.6mになる大型種。葉は楕円形で比較的広く、色は深緑で中央の葉脈が白くなる。花を取り巻く総苞の直径が2cmと小型だが、花茎が10~15cmと長く伸びて散房花序を作る。花序の直径は



図1. *Euphorbia cornigera*

20~25cmと大型で、花が空間を持ってゆったりと配置されている。総

苞の色は緑がかった黄色。新緑の葉を背景に総苞の色がよく映える。ボーダー花壇の中段に置くとよい。

(2) *E. dulcis* 'Chameleon' (図2)

草丈40~50cm。株はこんもりとよくまとまる。葉は長楕円形で濃紫赤色。耐寒性ユーフォルビアの中では葉の紫赤色が最も濃い。5月ごろ開花し、総苞が展開する。総苞は2枚、直径2~3cm。散房花序を形成する。この種の特徴は、総苞が展開時は黄緑色で、時間の経過とともにしだいに色が紫赤色に変わり、夏ごろには葉と同じ濃紫赤色になる点である。このように、総苞の色が変化するところから 'カメレオン' という品種名がつけられたのであろう。



図2. *Euphorbia dulcis* 'Chameleon'

(3) *E. griffithii* 'Fireglow' (図3)

高さ80cm~1m。葉は披針形で、濃緑色、中脈がピンクになる。秋には赤く紅葉する。5月に開花し、橙赤色の総苞が美しい。耐寒性のユーフォルビアの中で、総苞が鮮やかな赤色になるのは本種のみである。

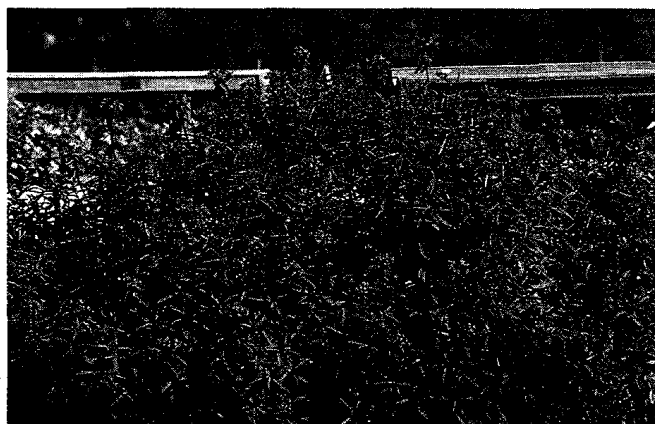


図3. *Euphorbia griffithii* 'Fireglow'

本種を多摩キャンパスで育てたが、暑さに強く、比較的よく育った。

(4) *E. sikkimensis* (図4)

耐寒性ユーフォルビアの中ではもっとも大型で草丈が2m



図4. *Euphorbia sikkimensis*

になる。披針形で長さ10~12cmの大型の葉をつけた茎を伸ばす。開花期は遅く7~8月。直径20cmほどの散房花序に、緑がかった黄色の総苞に包まれた椀状花序をつける。本種は株が大型であるのでボーダー花壇の後段に向く、ウィズレーガーデンのミックスボーダーでは後段に用いられ、幅3mくらいの広い面積を占めている。

2) 常緑性ユーフォルビア

(1) *E. amygdaloides* var. *robbiae*

(図5)

高さ70~80cm。葉は地際に密に着く、濃緑色で裏面は赤い。3月に花茎が伸長を始め花序を形成する。花序は直立し、分枝をしない。総苞は緑がかった黄色。集散花序をなし、6月まで咲き続ける。日本では最もよく栽培されている。



図5. *Euphorbia amygdaloides* var. *robbiae*

(2) *E. characias* subsp. *wulfenii*

(図6)

草丈1.2~1.5m。葉は線形で灰緑色、長さが13cmほど。直立する茎の先端に長さが30~50cm、直径が20~25cmの円筒形の集散花序をつける。総苞は黄緑色で、3月頃から咲きだし4月下旬から5月にかけて満開になる。著者がイギリスで初めてこの花を見たときは、その奇妙な姿に目を見張る思いだった。本種を多摩キャンパスで育てたが、イギリスで見たほどには大きく育たなかった。

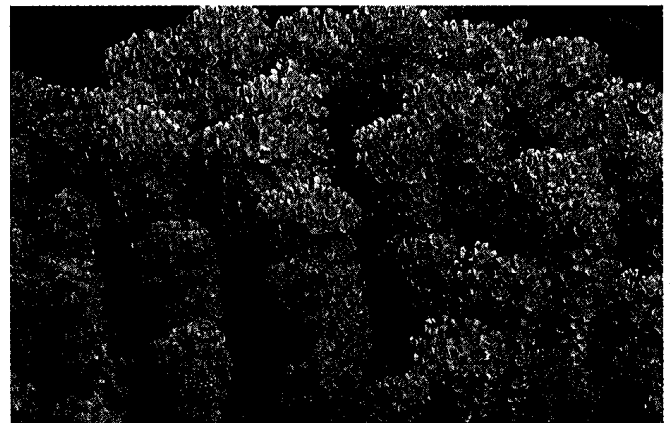


図6. *Euphorbia characias* subsp. *wulfenii*

(3) *E. myrsinites* (図7)

本種は匍匐性で茎が地面を這い、下垂する。茎の長さは60~70cm。葉は円形で先端が尖り、灰緑色で密につく。茎の先端に直径5~8cmの

散形花序を作る。総苞は鮮やかな黄緑色。3月初めのまだ寒さの残る花の少ない時期から咲きだし、茎を伸ばしつつ花序が発達していく。4~5月ごろ開花がピークを迎える。排水のよい石組みや、階段状の花壇に植えると、茎が垂れて本種の草姿の面白さが引き出せる。



図7. *Euphorbia myrsinites*

日本ではロックガーデン用の植物として扱われることが多い。

(4) *E. polychroma*

=*E. epithymoides* (図8)

草丈は50~60cm。葉は倒卵形で濃緑色。3月から茎が伸長を初め、4月の初めには茎頂に鮮やかな緑がかった黄色の総苞が椀状につく。花序の直径は8cm。6月の初めまで総苞の

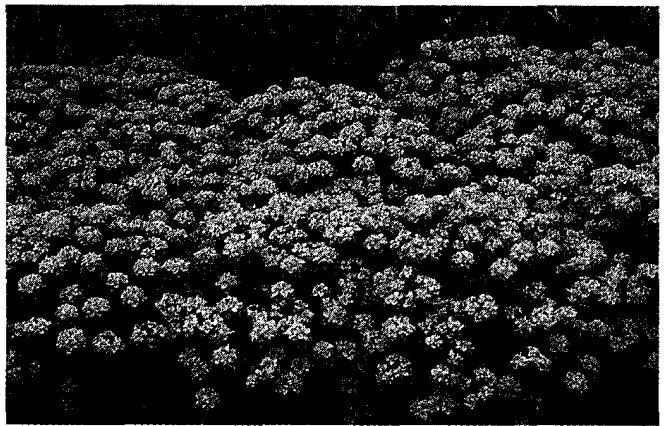


図8. *Euphorbia polychroma*

色が持続する。著者はこの種が4月の下旬にエジンバラの公園で花壇のかなり広い面積に植えられているのを見たが、淡い黄色の総苞が輝きながら咲く様子は、それは美しいものだった。そのように集団で咲くユーフォルビアを見たのは初めてだったので、その美しさに心を打たれるとともに、イギリスの花壇園芸の奥深さに感銘を受けた。本種も多摩キャンパスで育てたが、夏の暑さに弱いらしく、イギリスで見たようには大きく育たない。

参考文献

ブルツェル, C. (横井政人他訳) 2003 A-Z園芸植物百科事典 pp. 427~430. 誠

文堂新光社

土橋 豊・松居謙次・横井政人・横山二郎 1989 園芸植物大事 5巻 pp.
181~192 小学館

ヒノマルナーセリー 2007 <http://www12.plala.or.jp/hinomaru-garden>

Jeritto, L. and W. Schacht 1990 Hardy herbaceous perennials Vol.1 pp. 236~239

おぎはら植物園 2007 <http://www.ogis.co.jp>

Reader's Digest 1992 *A-Z of perennials Reader's Digest*

Rice, G. 1996 *The gardener's guide to perennials* p.179 Mitchell Beazley

タキイ種苗 1996 花と野菜ガイド p.60 タキイ種苗

Woods, C. 1992 *Encyclopedia of perennials* pp.121~123 Facts on File